

新定

中等習字帖

中



K220.72

49

2

橋本文壽編

玉木愛石書

新定 中興寺習字帖

中

大煉
京阪

開文館發行

緒言

一本書ハ中學校及ベコレト同程度ノ諸學校教科用書ニ充ツル目的ヲ以テ編纂セシモノナリ
一本書ノ材料ハ現今中學校ニ行ハル、國語讀本及ヒ漢文讀本ト連絡ヲ保チ、普通ノ文字ニ習熟セシメ、且ツ雅言・格言・詩歌等ヲ採輯シ、練習ノ傍、諷誦シテ興味ヲ感セシメ、學生ヲシテ倦怠ノ念ナカラシメンコトヲ勉メタリ
一本書ハ中學校教授要目ニ從ヒ、上卷ハ楷書・行書トシ、中・下二卷ハ行書

ヲ主トシテ楷書・草書ヲ交ヘ、上・中二卷ニハ大字・細字及ヒ假名ヲ納メ、下卷ニハ細字及ヒ假名ヲ納メタリ
一本書ハ毎回課スルニ左右二頁ヲ以テシ、隔週毎ニ淨書セシムルモノトス

編者識

盛年不重來一日難再晨

中一

及時當勉勵歲月不待人。

文學。和歌。連歌。落。

中二

首。宗匠。堪能。吟詠。

樂は苦の種
苦は樂の

中三

種子ほどに親を思入。

古陵松柏吼天虺
山寺尋春春寂寂

中
田

眉雪老僧時輟帚
落花深處說南朝。

見渡すかぎりにはなぐと空も一つの草のはら
野末の露にまがふ星尾花の袖にかる雲。

中五

草より出でてまた草に入りし者やとひてほし
人草しげく咲き白ふ花の都の月影に。

凡為人子之禮冬溫
而夏清昏定而晨省。

中六

樹欲靜而風不止矣
子欲養親不待矣。

心義子而旦笑

中
七

於我如浮雲。

人各盡其力而後已。

已所不能勿施於人。

おとこのしやうはなごころなりくひなのちぢりもしまるなり
たればなまきふゆふゆた岩もさしみづすしそ。

あまこくゆのぼせりあたらたう急三つおねづけて
まごより西にけし影のかたぶく見ふこそあはれなれ。

書ハ少年ノ滋味ニシテ
老年ノ娛樂ナリ順境ニ

中十

ハ心ノ飾トモナリ逆境ニ
ハ庇護ト慰諭トヲ與フ。

我等は人間天賦の能力を善養し利用しその畢生の事業は以て我等が父母師長國家社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て更に餘裕の綽々たるもの

中土

あり後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを長へに追憶せしめんことを期す。〓

吹く風をなごめる園と田と
みちをせたにさる山橋か南。

中
十一

都をば雲とらわたたらしかと
あまら風を吹く白河のをた。

題楠公訣子圖 賴襄

海甸陰風草木腥史編特

筆姓名馨一腔熱血存餘
瀝分與見曹灑賊庭。

動植物園博物館。

中
十
日

政廳國會議事堂。

一氣磅礴萬古存

中十五

七生人間報國恩。

皇國興廢在此一戰

中十六

各負一層奮勵努力。

八道の山よつどさくらば年の七年戌執りて
蹈み荒したる目の本の益荒雄は今歸るなり。

中七七

八道の山よつどさくらば國の譽とたかひて
花と教りたし日本の本の男子の骨を護れや。

積善之家必有余慶

中六

積不善之家必有余殃。

とかく武士の子は手強く手あらた成長教し申さず候う
ては追ひく成長の上公家や町人出家の様になり行き
天下の御為を教候様に相成らざる故何分にも手強く

體を幼年より鍛て育て候様に教したく候文武若た
出精教させ候がよろしく候文武を勵ましそれにて死に候
ほどの子は惜しからず候(は死に候うも苦しからず候。

久しき清考を打ちしるは其は強丸と人命と時の多敷を
清考して埒のきく事なるの唯々君同樹根の如き清く
源の事も根を引けの事味にして再味をし其れ留方面の

一五五を以て清考を其の脈方然はまた對して下を以し
今更ながら思跡を引きたる先づは久しき清考の初飛
考例の如き道ふ思道一讀を初とす。あ。

自らさへするものは年々せられ
自ら卑くせざる者はさへせらる。

中刊

多くの朋友をさへする者は
一の朋友をみせざるなり。

2020.17

玉木文壽石書



中世三

明治四十四年十月廿六日印刷
明治四十五年一月一日訂正印刷
明治四十四年十月廿九日發行
明治四十五年一月九日訂正發行

定價各金拾九錢

編者 橋本文壽

發行兼印刷者

森本謙藏

書者 玉木本三郎

發行者

森本專助

東京市神田區表猿樂町廿三番地
大阪府東區南久寶寺町四丁目十九番地

開文館

